

特集

「大阪新美術館」誕生で、大阪・中之島はどう変わるか
、川筋を活用したミュージアム群による産学共創へ

遠藤克彦氏・橋爪節也氏・山梨俊夫氏・西尾章治郎氏・柏木陸照氏

✿ 日本万国博覧会記念基金

EXPO'70基金 2018年度助成金贈呈式

✿ アーツサポート関西

「日本電通メディアアート支援寄金」創設

「丸」鋼管文楽支援基金」創設

第4回上方落語若手噺家グランプリ2018優勝者決定

トップインタビュー 企業と文化

西日本電信電話株式会社相談役 村尾和俊氏

祝 関西7市町が北前船寄港地日本遺産に認定

「大阪新美術館」誕生で、大阪・

～ 川筋を活用したミュージアム群による産学共創へ ～

1983年に大阪市が構想を発表して35年。水都大阪のシンボルである中之島に、ようやく新たな美術館が誕生する運びとなった。モディリアアーニや佐伯祐三など、世界もوراやむ近現代美術5,600点以上(評価総額約260億円)を所蔵する「大阪新美術館(仮称)」を建設する。当初の計画よりは縮小されたものの、2017年2月、大阪市による公募型設計競技(設計コンペ)の結果、国内外68件の応募の中から株式会社遠藤克彦建築研究所の提案が最優秀案に決定した。2018年度中に具体的なプランを固め、同年度末に着工、2021年度の完成をめざす。

遠藤氏の提案した大阪新美術館とはどういうものか。美術館やホールなどが建ち並ぶ`文化の中之島`をどう変えるのか。大阪新美術館によって中之島をどうブランディングし、地域を活性化していくのか。折しも文化・芸術・マスコミ関係者による「大阪市新美術館を考える会」が発足(7月6日)した。

設計者である遠藤克彦氏、有識者の方々や行政担当者に大阪新美術館建設と中之島への思いを語っていた。

(絵画所蔵先：大阪新美術館建設準備室)



アメデオ・モディリアアーニ「髪をほどいた横たわる裸婦」(1917年/油彩)



佐伯祐三「郵便配達夫」(1928年/油彩)



パッサージュでつながる「都市のような美術館」

遠藤克彦氏 建築家・株式会社遠藤克彦建築研究所代表取締役

中之島に新たな流れを

設計コンペに参加するにあたって、大阪市が作成した実施要領を読み、35年の長きにわたって建設できなかった美術館を今こそ実現させるのだという、大阪市の強い意思を感じました。冒頭に新美術館のめざすべき姿*が示され、建物や敷地、外構などの設計条件や、つくりたい美術館のイメージがしっかりと記されていました。その一例が「パッサージュ」というコンセプトです。

パッサージュとは、ヨーロッパの小径というか、屋根がついているアーケード、もしくは入り組んだ小径を意味する言葉です。そこは人の繋がりが自然発生的に生まれる場所で、新美術館もそうした存在にしたいと要領の中にはっきりと謳っていたのです。大阪市が求める空間のイメージがあって、その具体的

形を私ども専門家に委ねたという実施要領は、私の経験上、希有なケースでした。

私自身、設計活動を続けて、10年ごとに大きな節目がありました。このコンペに勝ち、自分自身の節目と大阪市の覚悟みたいなものが重なったということもあって、大阪にオフィスを開設しました。打ち合わせがスムーズに行えるだけでなく、大阪のことが肌感覚でわかり、しかも応援してくれる人たちの言葉を聞きながら設計が続けられる。大阪にいて中之島のポテンシャルをよく理解でき、なにより新美術館にとっていいことだと思いました。

この美術館は「浮いている黒い箱」が印象的かと思いますが、実はオーソドックスな提案です。一つはまわりのオフィスビルはグレー系の建物が多い。そんなに色気がないところに美術館がたたずむ風景をつくりたかった。馴染むというよりは、その建物があることによって、周囲と少しずつ繋がって行って、まわりの風景も変わっていくような象徴にしたいと思いました。

二つめに、南海トラフ地震への対策です。美術品は3階よ

中之島はどう変わるか



大阪新美術館外観イメージ(株式会社遠藤克彦建築研究所提供)



大阪新美術館建設予定地(左端は大阪大学中之島センター)

大阪市北区中之島4丁目32-14
敷地面積:約12,874㎡(美術館は約15,000㎡)
工事費(概算):130億円以内

りに展示・保管し、1・2階は市民に開かれた普段使いの
エントランス・レストラン・カフェにする。そこから上がっていく
ことで、都市と美術館が繋がっていることを認識できます。これ
により美術館に行くという確たる目的がなくても、パッサージュ
を回遊しているうちに美術品の中に入り込んでいるという感覚
を体験できます。市が要求するパッサージュは、都市と美術館
がかなり混在した公共空間だと思いますので、1・2階から上
がっていくところを立体的なパッサージュ、というコンセプトに
したのです。

数々のスタディ模型から導いた答え

こうした設計アイデアは、決して一回のスタディで生まれたの
ではありません。私たちは、大阪新美術館の設計でやるべき
ことを時間をかけて検討しました。40案ものスタディ模型(設計
内容を確認するために初期段階で作る簡易模型)を作り、その
全てにダメ出しを行い、その過程で大阪新美術館ができること
で「中之島」というまちがどう変わるのかを十分に考慮しました。

大阪新美術館は全方向に開かれたエントランスを持ち、国
立国際美術館や関西電力、堂島川、今後開発が進むであろ
う中之島の西側エリアともアクセスすることで、場としてのポテ
ンシャルをさらに高めることができます。美術館1階にカフェや
レストランを配置したのは、そうした周辺地域への賑わいの波
及を考えてのことです。それを誰もが行き来できる1階に配置
することで、さまざまな方向から人々を誘引すると同時に、浸水
災害から美術品を守ることも可能ですから、パッサージュと美
術館機能の二つの条件を満たすことができました。

中之島の美術館クラスター

中之島には大阪市立東洋陶磁美術館や国立国際美術
館があり、今年3月には民間の中之島香雪美術館(中之島
フェスティバルタワー内)がオープンしました。それぞれに異なる
特色があり、素晴らしい美術品を収蔵しています。これらを観
てまわることで、日本と西洋・東洋の美術史を俯瞰できるの

ではないでしょうか。また、美術館だけでなく大阪市中央公会
堂や中之島図書館、フェスティバルホール、歴史的建物やレ
ストランにいたるまで、さまざまな芸術・文化施設が歩いて廻
る距離のなかに集積している中之島は、とても希有な場所
です。大阪新美術館がこうした美術館や既存施設と連携するこ
とで、中之島における文化・芸術のネットワークを形成するこ
とができます。

つながることで場のポテンシャルを高めようと意識するこ
とは、全体の活性化にもつながる重要な視点です。その意味
で、中之島の「美術館クラスター」や大阪大学が提唱する「ア
ゴラ構想」、iPS細胞を使った先端医療研究など、美術館に
かかわらず、芸術・文化・学術・医療など、ジャンルを越えた
ネットワークをもつことで、新たな何かが起きそうな予感がし
ます。さらに中之島は、淀川を介して伏見から大阪市中央卸売
市場につながるルートや、その先のベイエリアや瀬戸内海の
商圏にもつながる「ハブ(結節点)」になるエリアです。中之島
西部の開発ビジョンが明確に示されていない現在、私たち民
間からも、そうした地域開発について意見を出していったほう
がいいと思います。

大人が文化を楽しむ姿を見せる

今秋、関西経済同友会が対岸の堂島リバーフォーラムで
「なにわの企業が集めた絵画の物語」展を行い、小学生の対
話型鑑賞プログラムや周辺の飲食店と連動し大人も楽しむ
美術展連動バルを行うと伺いました。

フランスのボンピドゥー・センター(国立近代美術館などが
あるパリの総合文化施設)に行ったとき、学校の先生に引率
された小中学生が車座になって、ピカソの絵を観ながら学芸
員の説明を聞いているところに出くわしたことがあります。それ
は、大人の私が聞いても面白い体験でした。

私はまちづくりにかかわる仕事のなかで、子供たちにもっと
夢をみさせるためにはどうすればいいかという相談をよく受けま
す。子供たちが美術から刺激を受けるように仕向けるために

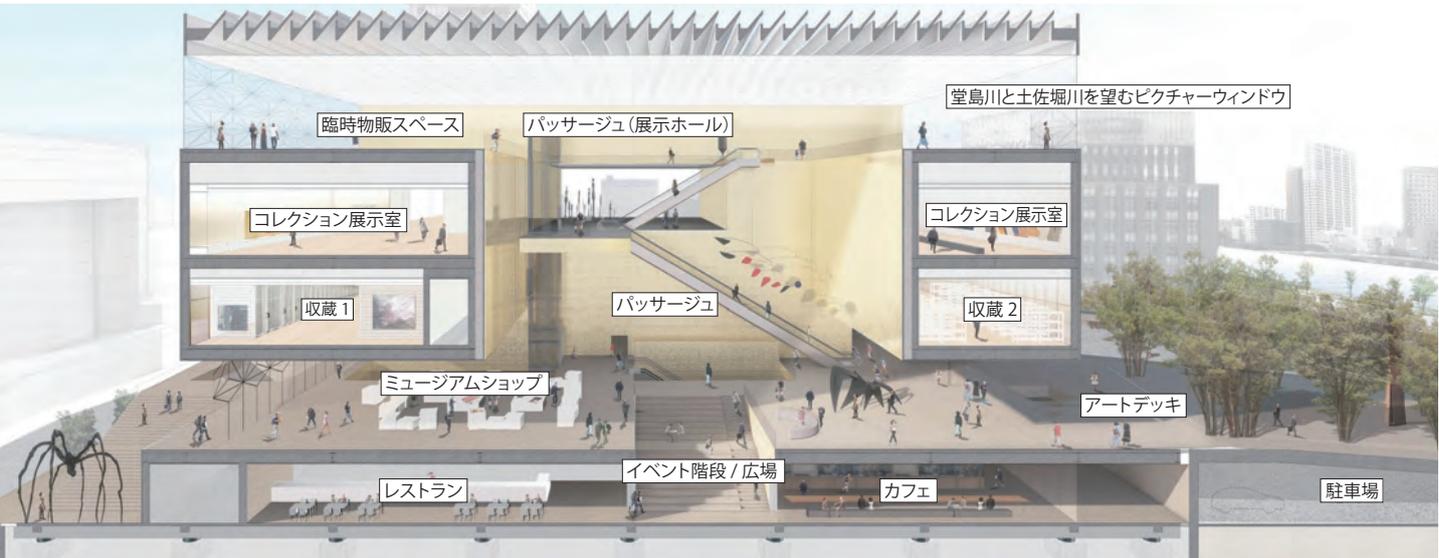
は、まずは大人が文化・芸術を楽しむことが大事だといっています。大人が生活を楽しんでいる姿を見せないと、子供は将来に夢を持っていないでしょう。美術館も同じで、お父さんやお母さんが、そこでワインや食事を楽しむようすを見せることで、子供の美術館への関心を引き出すことができると思います。大阪新美術館もそういうふうに使ってほしいと思いますし、中之島はそうのように文化・芸術が楽しめる場所です。関西経済同友会の試みは、新美術館にとってもありがたい提案です。

*新美術館のめざすべき姿

「大阪新美術館公募型設計競技 実施要領・平成28年8月大

阪市」より抜粋

- ・佐伯祐三らに代表される第一級のコレクションを活かして国際的な展覧会を常時開催し、海外からの観光客も多く訪れるような世界に誇る美術館をめざす。
- ・「大阪と世界の近現代美術」をテーマに、大阪市立美術館や東洋陶磁美術館にはない魅力を創造し、これまでにない独自性をもつ先進的な美術館をめざす。
- ・歴史、文化の蓄積が豊富な中之島を拠点に、周辺施設との連携や都市景観の形成についても意識し、大阪の都市格向上に貢献する美術館をめざす。
- ・運営は、民間事業者のノウハウを活用するPFI(Private Finance Initiative)手法を導入。顧客サービスに優れ、学芸員などにも使いやすい美術館をめざす。



大阪新美術館断面イメージ(株式会社遠藤克彦建築研究所提供)

大大阪時代の都市理念に学ぶ

橋爪節也氏 大阪大学総合学術博物館教授 (前館長)



東京や京都に 先じた計画

大阪における美術館の歴史は、明治21年(1888)に本町橋(大阪市中央区)の東詰にできた「大阪府立博物館中央館(美術館)」が最初です。このとき初めて「美術館」と名のついた施設が大阪に生まれたのですが、実際は見本市会場の建物で、殖産興業を主目的としていました。次いで、明治36年(1903)に日本初の国際博覧会である「第5回内国勧業博覧会」が天王寺公園で開催されたときに、会場内に美術館ができました。これも殖産興業的な意味合いの強いものでした。そして3番目が昭和11年(1936)にできた大阪市立美術館(天王寺区)です。

大阪市立美術館の建設は大正9年(1920)の大阪市議会で決議され、同12年(1923)に開館する予定でした。当時は東京市(当時)や京都市に公立の美術館がなく、大阪が先んじて計画したのです。結果的には東京や京都に追い抜かれ、昭和11年(1936)までずれ込みました。ただ一筋の通った明確な考え方があって、「学芸員が主導して収蔵品の管理や展覧会の企画を行う」という、当時の東京や京都にはない新しいタイプの美術館でした。なぜ大正時代にそんな美

術館をつくる計画があったのかというと、大正14年(1925)4月1日に大阪市が第2次市域拡張をし、それが大大阪の時代になるわけですが、そのときに、都市には文化施設をちゃんと揃えておかないと近代的な都市とはいえないというしっかりした考えが、当時の池上四郎大阪市長(第6代)を継いだ關一市長(第7代)にあったからです。

第5回内国勧業博覧会(1903年)での美術館と内部(絵画が柱に展示されている)



目指していたのは『一流の都市』

大正14年(1925)、大阪市は第2次市域拡張により人口で東京市を抜いて日本第1位の巨大都市となり、ニューヨークやロンドン、パリなどに次ぐ世界第6位の大都市と公称するようになりました。世にいう「大大阪時代」です。そして關一市長時代の昭和5年(1930)、大阪都市協会*は機関誌『大大阪』(第6巻第11号)で、「徒に人口のみの多いことが、決して

現代都市の誇りにはならない。(中略)大都市には大都市であり得るだけの都市施設が整はなければならぬ。文化的にも経済的にもその点(点)に欠(欠)けるところがあれば、それは都市として二流三流のものでなければならぬ」と呼びかけました。

大大阪時代には、まちづくりと、美術館などの文化芸術施設の建設は密接に関係していました。少なくとも大正末期から昭和のはじめにかけて、大阪市は美術館を教育・文化面で近代都市へと発展させる契機と考えていたのです。当時、大阪市は美術家協会のような組織もつくりようと考えており、実現はしませんでした。文化行政としては先見の明がありました。

国公立の芸術大学がない大阪

大阪には未だに国公立の芸術大学がなく、そうした大学に進学して美術を学びたい人は、東京(東京藝術大学)や京都(京都市立芸術大学)へ進学しなければなりません。大正12年(1923)に大阪市は美術界を支える拠点として市立工芸学校(大阪市立工芸高等学校の前身)を設立しましたが、いかんせんこれは旧制中学で、今でいえば高校にあたります。

現在の大阪人は、こうした先人たちの思いをもっと認識すべきだと思います。大阪市のホームページ(市民の声)に投稿された「美術鑑賞なんて、しょせんはお金持ちの趣味」「高いお金を払って美術品を買集めるなんて無駄」という意識にとらわれては、都市の発展は望めないでしょう。大阪市民には昔からそうした意識をもつ傾向があるようで、大正13年(1924)に天王寺で開校した大阪美術学校の校長・矢野橋村(やのきょうそん：1890～1965)は、「大阪というのは美術家を殺しこそすれ、育てるところではない」という言葉を遺しています。美術に対する人々の無理解を嘆いてのことでしょうが、だからこそ続けて「大大阪の美術をこのまま放っておいていいのか。大阪美術学校の生徒諸君よ奮起せよ」と檄を飛ばしました。

企業家コレクションを生かす

橋村の悔しい思いはよく理解できますが、そうした大阪でも、素晴らしい美術作品を個人で数多く蒐集する企業家がありました。なかでもメリヤス肌着の製造や海外貿易で財を築いた山本發次郎(1887～1951)は、大阪市出身の洋画家・佐伯祐三(1898～1928)の大コレクターでした。發次郎は、「美術品の蒐集は時勢に反した道楽のような誤解を招く恐れがあるが、美術品の蒐集は永遠的な文化事業であると信じてやっている」という主旨の言葉を遺しています。そのコレクションが大阪市に寄贈されたことで、昭和58年(1983)に近代美術館の建設が構想されたのです。実際に新美術館構想は40年もかかったこととなります。これをどう見るかです。

もう一つ、どう見るかという点では、バブル崩壊から平成という時代は何だったのかということです。平成時代は30年で終わりますから、この30年間、新美術館は準備と建設を決めただけで終わりました。バブル崩壊後に「失われた10年」とか「失われた20年」といわれますが、その「失われた30年」の一つが新美術館だったのかもしれない。それがやっと復活します。それも24,000㎡の計画が、規模を縮小して15,700㎡、つまり3分の2です。私は大阪や市民が絶対損をしていると思います。大阪新美術館の所蔵品は5,600点以上あり、現在の評価額はすごい金額になります。今年5月、ニューヨークのオークションでモディリアーニが約172億円で落札されたことがニ

ュースになりましたが、大阪の新美術館構想では、19億3,000万円で購入したモディリアーニの『髪をほどいた横たわる裸婦』をはじめ、多くの高価な作品がずっと倉庫に眠ったままになっているのです。

*財団法人大阪市協会

市民生活に関する諸問題を調査・研究し、大阪の近代的まちづくりへの関心を促すため、大正14年(1925)に關一大阪市長によって創設。月刊誌『大大阪』『大阪人』などを発行した。平成19年(2007)解散。

「阪神間モダニズム」という誤解

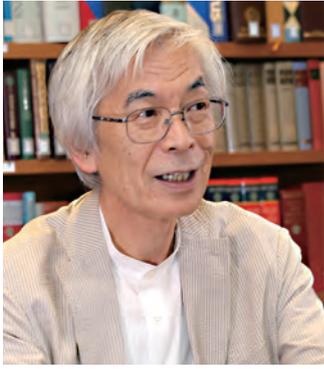
近年、大阪の近代文化・芸術を指して「阪神間モダニズム」といわれますが、これは神戸や西宮などの郊外型文化のなかに大阪が含まれているような錯覚を与える表現です。中之島や船場にある近代建築や大阪の画家たちによる美術作品は、「阪神間」ではなく「大大阪のモダニズム」です。兵庫県下の美術館が、自分たちの地域の展覧会として何度も「阪神間モダニズム展」を開催したことで、いつしか大阪もその一部と見なされてしまったのだと思います。兵庫県には兵庫県立美術館(神戸市)をはじめ、西宮市大谷記念美術館(西宮市)、芦屋市立美術博物館、伊丹市立美術館があり、尼崎市でも展覧会が開催されています。兵庫県はそうして近代美術を発信していますが、大阪は府立の美術館がなく、臨時の企画展しか開催されないために「大大阪のモダニズム」を発信する機会を逸してきたのです。また、京都の国立近代美術館(左京区)や京都市美術館(同)などでは、京都の画家たちの展覧会を度々行っています。しかし、大阪はそうした発信拠点や機会をもたなかったために、当の大阪人が大阪の美術を知らないまま今日に至り、兵庫や京都に比べ大阪の美術を一段低く見るという深刻な問題を生んでいます。

自分たちの文化への誇りが地域の発展を促します。美術館やホール、図書館、市役所などが集積する中之島は、大阪を象徴するシビックセンターであり、発信力もあります。大阪新美術館を集客性だけで考えるなら、梅田北ヤード(大阪駅北側の開発地域)につくれればいい。しかし、それを中之島にもってこることで美術館群をつくり、大阪の文化力を全体として高めようという意識が大事なのです。

◇素数、の都市をめざす

歴史的・文化的に、江戸(東京)・京都・なにわ(大阪)を総称して「三都」と呼ぶことがあります。私は、こうした都市は数学でいえば「素数」とであると主張しています。素数とは、1、2、3、5、7、11、13…と、自然数のうち1かそれ自身でしか割れない数字です。三都もこれと同じで、その都市固有の要素以外で分割できない性質の都市であると解釈できます。例えば、かつて金沢や高山、川越などの地方都市で営業戦略的に「小京都」や「小江戸」と称することが流行しましたが、これはその都市の歴史や環境に京都有るいは東京的要素を掛けた都市、つまり素数の都市に2や3を掛けた都市であって、その都市固有の性質を示したものではありません。小京都や小江戸は素数のまちではないのです。

大阪とりわけ中之島は、ミュージアムや近代建築など川筋に文化施設が集積して、東京にもない極めて素数性の高い地域です。中之島の「川筋を活用した文化施設群」が一層洗練され、パワフルに活動できるよう大阪は努力すべきと考えます。



これからの美術館に求められること

山梨俊夫氏 独立行政法人 国立美術館 国立国際美術館 館長

互いに連携し 強化する時代

大阪新美術館の設計コンペを行うに際し、私はその審査評価会議の座長として審査にあたりました。美術・都市計画・

建築の各専門の有識者7名で構成された審査評価会議では、68者の提案の中から第1次審査で5者に絞り、その中から第2次審査を経て株式会社遠藤克彦建築研究所の提案を最優秀案に決定しました。寄せられた提案は委員の予想を上回る創造性に富んだもので、その絞り込み作業は非常に困難でした。第2次審査の対象となった5者の設計提案は、いずれも甲乙つけがたく、委員たちは大阪の新しい美術館にふさわしい設計提案を求めて、熱心な議論を重ねました。

遠藤氏の提案は、美術館としての機能や使い勝手に加え、シンプルながらも中之島に浮かび上がるような存在感のある外観や、開放的なパッサージュ空間が大阪新美術館の独自性を際立たせていました。とりわけアートデッキや美術館1階のカフェなどのサービスエリアが、大阪市が求める中之島エリアでの人々の回遊性や賑わいの向上に貢献すると高く評価されました。私も国立国際美術館としては、そうした大阪新美術館のパッサージュがこちら側にもつながるわけですから、現在、両館をブリッジでつなぐ計画を進めています。隣り合う美術館がライバル意識をもって対抗するのではなく、美術というテーマでお互いが連携し、地域の活性化に向けて共働しようという考えから、物理的にもつながろうというものです。

美術館が展覧会を開催するためには、準備に3～4年ほどかかります。大阪新美術館の開館予定は2021～22年ですから、すでに両館の担当者や関係者による話し合いが始まっています。また、大阪新美術館が完成すれば、中之島の美術館は国立国際美術館、大阪市立東洋陶磁美術館、中之島香雪美術館と合わせて4館になります。こうした地域にあって、今後、美術館はお互いの連携をさらに強め、大阪が持つ美術の歴史や現状を共有し、補完し、強化する視点をもって一緒に考えることが一層重要になります。東洋陶磁美術館が開館35周年記念・日中国交正常化45周年記念で「唐代胡人俑(こじんよう)」の展覧会(2017年12月～2018年3月)を行ったとき、国立国際美術館の人体をモチーフにした彫刻9点を貸し出し、胡人俑が並ぶ空間に現代美術の彫刻を展示しました。こうした作品の貸し借りや、展覧会の企画自体を共同で行うこともあるのです。

大阪の美術館の課題

美術館の役割は社会状況によって変化する部分もありますが、核となるのは自分たちがどんなコレクションを持ち、どんな作品を集めていくかということです。例えば私も国立国際美術館は、20世紀以降の欧米美術や20世紀後半から現代にかけての日本、欧米、アジアの美術を中心にコレクションしており、展覧会活動もその時代にもっとも力を入れています。

一方、大阪という視点で見れば、日本の美術史上重要な役割を果たしているのが近代美術で、黒田重太郎、鍋井克之、小出楯重などに代表される優れた作品が多くあります。

しかし、大阪では豊臣秀吉や戦国時代の堺の美術などは紹介される機会が多くても、近代美術に関しては多くのコレクションがあるにもかかわらず、きちんと検証したり、紹介していく美術館がありません。大阪新美術館には、そうしたことに力を入れてほしいと思います。また、大阪には家電メーカーをはじめ大阪発祥の企業が多く、大阪新美術館ではそうした企業が保有するプロダクトデザインを調査し、企業と連携しながら研究していくことも重要だと思います。

大阪は企業コレクションや個人の美術コレクターが多いところですが、私は神奈川県立近代美術館に勤務していた頃、企業が所蔵する絵を貸してもらいに大阪へ来たことがよくありました。そのように企業や個人がどんな作品を持っているかを知っておくことも美術館の大事な仕事です。大阪新美術館は公立ですから、財政的な支援も含めて経済界との協力体制をつくっておかないと、市の予算だけでは運営が大変です。そのためにも美術館の人たちには、色々な企業を足繁く回り、協力を取り付けていく地道な努力が必要です。他方、企業の方々には、もっと美術に関心をもっていただきたいとも思います。

美術館の役割でいうと、ここ30年ぐらいの間に外部に対する教育普及面での働きかけが活発になってきました。そのひとつは学校と連携して先生や生徒に来館してもらうよう働きかけることですが、そもそも古い美術館には講演や対話型鑑賞などのワークショップをするスペースが少なく、収蔵庫や展示室の空調管理の基準も厳しくなっている現在、外国のいい作品をもってくることも困難です。新しい美術館にはそうしたスペースや設備が必要ですし、近年はレストランやショップといった付帯施設も重視されます。ときにはコンサートなど美術活動とは異なる用途に使用する懐の広さが求められます。そうした教育普及や地域貢献も含め、これからの美術館には、ご来館いただくためのさまざまなきっかりづくりも必要になるでしょう。





大阪大学中之島アゴラ構想

*アゴラ…「広場」を意味するギリシャ語

西尾章治郎氏 大阪大学総長

共創による 魅力的な文化都市 形成を目指して

「大阪大学中之島アゴラ構想」、大阪大学は今、この構想の具体的実現に向けて準備を進

めています。

大阪市北区中之島4丁目は、大阪大学発祥の地であり、大阪の政財界や市民の方々の熱烈なご支援により、地域社会と結びついた「市民主導の帝国大学」として昭和6年(1931)に誕生した本学にとっては、特別な意味を持つ場所です。

また、中之島には近代的なオフィスビル、行政機能、歴史的建築物、コンベンションホール、コンサートホール、美術館、科学館、リバーサイドのカフェ・レストランなどさまざまな集積があり、市民にとっても特別な魅力のある場所です。

この中之島の地で、さまざまな知的リソースやビジネスリソース、人材が集い、これまで進化してきた本学の知と交差させることによって新たな社会的価値を発信する拠点を作りたいと考えていたさなか、大阪府と大阪市からの依頼を受け、この構想を提案しました。

具体的には、本学が所有する大阪大学中之島センターを中心に、アート、社会学共創、産学共創の三つの分野で、多様なステークホルダーとの共創(co-creation)活動のハブとなる拠点の形成を計画しています。本学が有する卓越した学術・芸術・技術という三つの「術」をもって、中之島エリアの、ひいては大阪の「文化」の向上に貢献していきたいと考えています。

とくにアートの分野では、大阪市が建設予定の新美術館、中之島のシンボルの一つとして定着した国立国際美術館といった周辺の芸術関係機関とも深く連携し、共同研究や展覧会・パフォーマンスなどの共催といった活動や、都市における芸術的な空間として京阪電車なにわ橋駅内に開設された「アートエリアB1」における多彩な活動をさらに充実させていきます。このことにより、大阪の中心地である中之島に、大阪の芸術の深化に寄与する魅力的な拠点を形成することができればと思います。

社会学共創においては、ビッグデータの市民向け検索・閲覧機能や、本学の精神的源流である適塾を通じた歴史啓発活動、医療通訳や各種情報などの多言語化に対応した共創事業、現在も行っている社会人向けの学び直しの場の提供やアウトリーチ活動の展開を構想しています。

産学共創においては、イノベーション人材の育成や、都心の強みを活かし、さまざまな企業に対して本学の技術や研究情報を発信し、企業との共創活動に繋げていく、オープンイノベーションの窓口の形成などを構想しています。

これらは、総合大学として幅広い知を持ち、さらには大学の
(p7へ続く)



※写真提供:大阪大学、国立国際美術館、東洋陶磁美術館、中之島香雪美術館

地域貢献度調査や最も革新的な大学ランキングにおいて、国内トップにランキングされた実績のもとに「地域に生き世界に伸びる」を標榜する本学の強みを活かした取り組みであり、まちづくりや産業創出に必ず貢献できることを確信しています。
以上に掲げる中之島アゴラ構想の実現を強力に推進す

るために、大阪大学中之島センターを大幅に改修し、機能強化することを計画しています。関係機関と緊密な連携を図りながら、本学にとって、そして市民にとっても特別な場所であるこの中之島の活性化に貢献し、大阪、関西の盛り上がりにつなげていきたいと考えています。

地域活性化の起爆剤として期待 大阪市新美術館を考える会

2018年7月6日／リーガロイヤルホテル

大阪新美術館の設計が完成に近づいた今年7月6日、東西日本を考える会*は、同美術館の設計者で同会のメンバーである遠藤克彦氏を囲み、新美術館の具体像について話を聞いた。また、大阪新美術館担当の大阪市経済戦略局長の柏木陸照氏を招き、「中之島の新美術館がめざすもの」と題して、大阪府がめざす新美術館の新たなあり方などについて説明を受けた。

*東西日本を考える会

大阪商工会議所会頭だった佐藤茂雄氏(2015年没)が、「文化立国としての日本のあり方について自由に語り合う場をつくろう」と呼びかけたことに端を発し、弁護士の和田誠一郎氏が幹事となって賛同者を募り、文化・芸術・マスコミ関係者ら約50人のメンバーで構成された。公益財団法人関西・大阪21世紀協会の堀井良殷理事長が代表世話人を務める。



約50人が出席した大阪市新美術館を考える会
(2018年7月6日)



中之島の美術館がめざすもの

柏木陸照氏 みちてる 大阪市経済戦略局長

新たなあり方を 創造する

大阪市の博物館群は、大きく三つのタイプに位置付けられます。市立美術館や東洋陶磁美術館のような特別展

を核に事業を展開する「美術系」、自然史博物館のように常設展を核に学校利用や市民向けの各種事業を展開する「自然系」、歴史博物館や市立科学館のような美術系・自然系それぞれの要素も兼ね備えた「歴史・科学系」です。大阪新美術館はこうした既存のタイプとは異なる、今までにない新たなあり方を創造する美術館として位置付けています。基本的には「社会教育の拠点」「情報発信の拠点」「ビジネスの拠点」「にぎわいの拠点」といった四つの拠点機能を備えますが、こうした機能だけにとらわれるのではなく、新たな機能をどんどん付け加えてまいります。いわば常に自己変革を遂げていく「進化系」の美術館です。大阪府は、こうした新美術館で生まれる新たな真善美が大阪全体の価値を高め、創造していくことをめざします。

*四つの拠点機能

- 1) 社会教育拠点…子供のためのワークショップ、若手作家の発掘やキュレーター育成、アートを通じた生涯学習の場の提供など。
- 2) 情報発信の拠点…第一級のコレクションを活用した展覧会、海外の注目を集める具体美術アーカイブ、企業や大学との連携によるIDAP(インダストリアルデザイン・アーカイブズ研究プロジェクト：工業デザインの保存記録事業)など。
- 3) ビジネス拠点…話題性の高いショップやレストランの誘致、美術品を活用したコンテンツビジネス、企業のレセプション会場としての活用など。
- 4) にぎわい拠点…国立国際美術館や市立科学館との連携、芝生広場などによる周辺住民への憩いの場の提供、集客イベントの積極的な展開など。

全国初の地方独立行政法人化

新たなあり方を創造するために、大阪府は新美術館の運営について二つの革新的な改革を行います。一つは「ガバナンス改革」で、平成31年4月より大阪市立の博物館・美術館すべてを、全国の自治体のなかで初めて「地方独立行政法人」による運営に移行します。美術館や博物館を、継続性・機動性・柔軟性・自主性を備えた地方独立行政法人に移管させることで、経営と運営の一元化を図ります。二つめは「マネジメント改革」で、新美術館の経営にあたってはコンセッション方式によるPFI*を導入し、民間企業に新美術館の運営をゆだね、一定のルールのもとに自由裁量で運営に携わってもらいます。これによって民間企業の創意工夫と学芸員の専門性のコラボレーションによる魅力ある運営の実現を図っていきたく考えています。

*コンセッション方式によるPFI

コンセッション(concession：譲与、免許)方式は、事業者が免許や契約によって独占的な営業権を与えられること。PFI(Private Finance Initiative)は、公共施設の運営や維持管理などに民間の資金とノウハウを活用し、民間主導で効率的かつ効果的な公共サービスの提供を図る考え方。イギリス発祥の概念で、「小さな政府」を掲げるサッチャー政権下の1992年に実施された。

美術館の未来像を示す

中之島のまちづくりを推進する観点では、大阪府は新美術館を中之島におけるランドマーク的な唯一無二の存在にしたいと考えています。ここでは美術だけではなく、音楽や伝統芸能など「アート」と呼ばれるあらゆるものを融合させていくことで、美術館そのもののあり方を創造していきます。それはとりもなおさず美術館の未来像を示すことであり、「見通せない未来をどう見通すか」「異なるものをどのようにして融合させるか」といった新しい芸術のあり方を体現して見せることなのです。

(「大阪市新美術館を考える会」での発言要旨)

日本遺産

「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～」

関西7市町などが追加認定

文化庁の日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」に、2017年4月に認定された11市町に加え、このほど関西7市町(宮津市、大阪市、神戸市、洲本市、赤穂市、高砂市、新温泉町)を含む全国27市町が追加認定され計38市町となった。去る6月6日、大阪市内において、その関西の7市町が主催する共同記者会見が行われた。

文化庁が日本遺産に認定している「北前船寄港地」は、「日本海沿岸に点在する港町には広大な商家や豪壮な船主屋敷、社寺に奉納された船の絵馬などが残り、節回しの似た民謡が唄われている。これらの港町は、荒波を越え、動く総合商社として巨万の富を生み、各地に繁栄をもたらした北前船の寄港地・船主集落で、時を重ねて彩られた異空間として今も人々を惹きつけてやまない」というもの。

会見では七つの寄港地のゆかりや見どころ、それらの連携強化や交流拡大、さらなる認知度向上への取り組みが紹介された。

関西・大阪21世紀協会は2015年7月、民が支える公共的文化活動の推進役として「北前船寄港地フォーラムin大阪」の実行委員会事務局を務めた。その際、2007年に同フォー

ラムが開催されて初めて、それまでの開催地関係者一同が大阪に集結。日本遺産認定に向けた機運を盛り上げたことも、この度の認定を後押しする形となった。



共同記者会見に出席した各市町の幹部。向かって左から、浜田健一郎氏(一般社団法人 北前船交流拡大機構理事長)、上田清和氏(宮津市副市長)、田中清剛氏(大阪市副市長)、岡口憲義氏(神戸市副市長)、児嶋佳文氏(赤穂市副市長)、大内治氏(高砂市副市長)、上崎勝規氏(洲本市副市長)、田中孝幸氏(新温泉町副町長)



日本遺産とは

地域に点在する有形・無形の文化財を対象に、文化庁が2015年度から「地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリー」として認定し活用する制度。



元結屋(三上家)という廻船業で財をなした船主や、廻船や北前船の船頭をとくに由良地区から多く輩出。旧三上家住宅(重文)や船頭衆の信仰を集めた「由良金毘羅神社」がある。日本三景の「天橋立」は観光名所。



北前船の起終点。「天下の台所」(諸国物産の集散地機能)と呼ばれた。また、北海道から運ばれた昆布を用いて出汁文化が開花した。住吉大社境内には、北前船ゆかりの廻船業者が奉納した600基あまりの石灯籠が立ち並ぶ。



古来、瀬戸内海水運の中核港で豪商・北風家や高田屋嘉兵衛らが活躍。高田屋嘉兵衛本店跡地の石碑や献上灯籠、北風荘右衛門らが造営した地蔵、帆布を発明した工楽松右衛門の墓など当時の偉人らの足跡がたどれる。



都志浦は江戸時代に海運業者が多数を占めた集落で、高田屋嘉兵衛の生誕地。船主らが信仰した都志八幡神社や嘉兵衛ゆかりの地など往時の町並みをしのぶことができる。高田屋顕彰館は北前船関連の資料を多数展示。



古くから廻船業で繁栄。近世は西廻り航路の寄港地、塩廻船の船主集落として隆盛。海に向かう道路沿いに船主邸宅・寺院・浦会所が軒を連ねる町並み、大避神社の奉納物や船祭は廻船業とともに歩んだ歴史を伝える。



西廻り航路で活躍した船主の拠点でもあった。帆布「松右衛門帆」を開発した工楽松右衛門の旧宅、謡曲『高砂』の発祥地で、縁結びで有名な高砂神社、兵庫県歴史的景観形成地区に選ばれている高砂町の町並みなどがある。



北前船による繁栄と幸せをもたらす「麒麟のまち」として今に伝わる。歌人前田純孝ら文化人や画家を輩出。枕草子、古今六帖に詠まれた名勝「雪の白浜」、廻船問屋群、為世永神社、食文化「あごちくわ」などがある。

EXPO'70 基金 2018年度助成金贈呈式

大阪万博の開催理念にふさわしい助成

関西・大阪21世紀協会は、独立行政法人日本万国博覧会記念機構から日本万国博覧会記念基金(EXPO'70基金)事業を承継して5年目の今年6月11日、リーガロイヤルNCBにて初めて助成金贈呈式を行いました。2018年度は、国内外の合計42事業(47事業採択後に5事業が辞退)に対して総額7,645万円を助成。そのうち国内外から37団体(約80人)が贈呈式に出席し、当協会の堀井良股理事長より助成金の目録が手渡されました。

堀井理事長は主催者挨拶で、「EXPO'70基金の存在や活動について多くの人々に知ってもらおうと同時に、1970年の大阪万博の開催理念に沿ってより良い助成事業を行っていくため、贈呈式をさせていただいた。大阪万博の理念は「人類の進歩と調和、だったが、21世紀の今日になっても世界情勢は激動し、人々は分断と紛争に悩まされている。そうした中であって、大阪万博の開催理念を継承する意義はますます強くなっている。今後も文化の多様性を包摂しつつ、地域社会の平和に貢献するEXPO'70基金ならではの助成事業に、一層力を入れていきたい」と語りました。

目録贈呈に続いて、第1審査会審査委員長の杉原充志氏(羽衣国際大学 現代社会学部教授)による審査総評が行われた後、2018年度の助成団体である認定特定非営利活動法人ミュージック・シェアリング(五嶋みどり理事長)と、特定非営利活動法人パンゲア(森由美子理事長)により、活動の事例発表が行われました。ミュージック・シェアリングの事例発表では、五嶋みどりさんが海外の若手演奏家



贈呈式会場風景

贈呈式に参加した37団体と主催者、審査委員



とカルテットを組んで演奏が披露され、参加者は眼前の迫力ある生演奏に心を奪われました。また、第2部の交流会では、2018年度の助成団体が会場内にブースを設け、日頃の活動を紹介。審査委員の先生方からは、「直接交流する機会を得て、生きた助成となっていることが実感できた」と、この贈呈式が高く評価されました。参加者たちが情報交換するなど和やかな交流が行われました。



贈呈式後の交流会風景

重点助成事業を新設

EXPO'70基金事業では、2018年度からは助成事業の原点に戻り、万博の成功を記念するにふさわしく、「日本万国博覧会開催の意図*」の趣旨に適った国際相互理解の促進に資する活動に助成対象を絞り込んで支援することとなりました。とりわけ大きな助成効果が期待でき、EXPO'70基金事業のシンボルとなる事業に上限金額1,000万円まで助成できる「重点助成事業**」制度を新設。「万博ならではの」「万博だからこそ」といえる事業を採択することで、他の助成事業とは異なる独自性を打ち出すようにしています。

*日本万国博覧会開催の意図(抜粋)

日本万国博覧会がめざしたものは、世界にはさまざまな文明が多角的に共存することを、理解と寛容の精神によって認め、それらの多様性の調和の中にも進歩が望まなければならない、という「調和的発展」の精神でした。これは東洋思想の「和」の心を現代世界に呼び戻して、東西を結ぶ新しい理念として発展させようとするものでした。

**2018年度に唯一採択された重点助成事業「1970年日本万国博覧会がUAEに及ぼした影響などの研究とその文書化(事業者: Brownbook / Cultural Engineering) 交付決定額700万円」は先方の辞退により、助成は見送られました。



審査総評

万博理念に適っているかどうかを最重視

2018年度は助成対象を「国際相互理解の促進に資する活動」に絞り込んだことで、助成を受けようとする団体の活動には、昨年度以上に国際性を伴うことが必須条件となり



杉原充志氏(羽衣国際大学 現代社会学部教授)

ました。そのため当初は申請総数が減ってしまうのではないかと懸念されましたが、実際は例年並みの211件の申請がありました。また、申請段階で「重点助成事業(上限1,000万円)」と「一般助成事業(上限300万円)」の選択制にしたことにより、申請者の方々にとってはどちらの助成を受けようか迷われたかもしれません。結果は申請総数211件(うち海外26件)のうち、2割近い39件が重点助成に、172件が一般助成の申請にチャレンジされました。

それらの審査にあたっては、申請締切後の2017年10月～11月の2か月をかけて事務局にて申請要件を満たしているかどうかチェックし、それを通過したものが審査対象となりました。そうして第1審査会(審査委員長・杉原充志氏)と第2審査会(審査委員長・同志社大学経済学部教授 河島伸子氏)それぞれ6人・計12人の審査員が、重点助成については全ての申請書を読み込み、大阪万博の開催理念にふさわしいものを推薦。一般助成については、二つの審査会に振り分けて採点・評価しました。重点・一般合わせると、一人の審査委員が百数十件の申請書を精査したことになります。審査員の方々には本当にご苦勞をおかけいたしました。

採択の可否は各審査員の合計点で決めましたが、その際、大阪万博の開催理念に適っているかどうかを最重視し、世界の調和ある発展に貢献できるかどうかを十分に審議しました

採択の可否は各審査員の合計点で決めましたが、その際、大阪万博の開催理念に適っているかどうかを最重視し、世界の調和ある発展に貢献できるかどうかを十分に審議しました

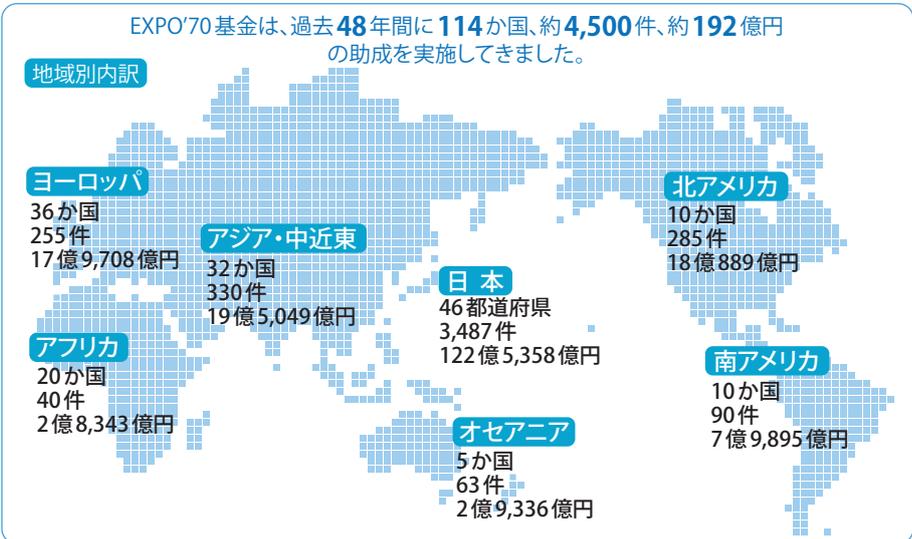
ので、合計点が採択ラインに達していなくても、その趣旨を十分満たすものであれば採択の対象としました。最終的には重点助成事業1件(700万円)と一般助成46件の計47件(うち海外10件)が採択され、助成総額は8,900万円で、当初予定していた総額9,200万円の範囲内に収まりました(採択後、重点助成事業1件と一般助成4件は事業が実施されず辞退)。採択率は重点助成が2.6%、一般助成は26.7%で、とくに重点助成は非常に高い競争率となりました。

2018年度の審査を振り返ると、申請団体には過去の活動実績や申請書の記載の巧拙というより、助成対象となる活動内容や目的が大阪万博の開催理念や当基金の助成の趣旨にどれだけ合致しているかが選考の最大のポイントとなりました。今後も多くの団体のチャレンジをお待ちしています。

2018年度に採択された47件の国別内訳()内は件数



EXPO'70基金は、過去**48**年間に**114**か国、約**4,500**件、約**192**億円の助成を実施してきました。



事例紹介 助成団体を代表して、2団体の活動が紹介されました。

認定特定非営利活動法人 ミュージック・シェアリング

『本物の音楽、に触れてもらうプログラム』

ミュージック・シェアリングは、1992年にヴァイオリニストの五嶋みどりさんが文化・芸術の振興と子供の健全育成を目的とした「みどり教育財団東京オフィス」を設立したことにはじまり、2002年に現法人名に組織変更されました。以来、日本および開発途上国の子供たちに音楽を通して豊かな心を育むとともに、音楽家の社会貢献活動

に対する理解を深める場を提供しています。

具体的には、五嶋さんをはじめとする協力アーティストが小学校などを訪れてコンサートを行ったり、楽器に触れる体験をしてもらったりする「訪問プログラム」、養護学校や特別支援学校と協力し、音楽大学の学生や卒業生を派遣して楽器の演奏指導を行う「楽器指導支援プログラム」、五嶋さんが世界からオーディションで選ばれた若手

演奏家とカルテットを組み、アジアの国々を訪れて西洋音楽に触れる機会の少ない子供たちの前で演奏を披露することで、子供たちの創造性や相互理解を育み、明日への夢を抱ききっかけ作りを提供する「ICEP（インターナショナル・コミュニティー・エンゲージメント・プログラム：愛称アイセップ）」です。2006年からベトナム、カンボジア、インドネシア、モンゴル、ラオス、バングラデシュ、ミャンマー、ネパール、インドの9か国で訪問演奏を行いました。ICEPには、音楽による社会貢献とはどのようなことなのかを若手演奏家と現地の音楽学生とともに実体験を通し

て認識してもらう意図もあります。

贈呈式の事例紹介では、五嶋さん率いる「ICEPカルテット」が演奏を披露し、参加者一同が、ミュージック・シェアリングが理念に掲げる本物の音楽*に聴き入りました。

*ミュージック・シェアリングが掲げる「本物の音楽」とは、完成度・芸術性の高い音楽と、音楽の本質（音楽を学ぶ者が自らの演奏する音楽によって他者に何をもちたすことができるのか、または何ができないのか）を経験的に知ることの二つを指しています。



事例紹介をした中村皓人氏(左) (ミュージック・シェアリング)



ICEPカルテットによる演奏 (左端が五嶋みどりさん)

特定非営利活動法人 パンゲア

子供たちが多文化共生の楽しさや尊さを体験

パンゲアは、2001年の9・11(米国同時多発テロ事件)をきっかけに、森由美子氏と高崎俊之氏(副理事長)によって設立されました。当時、二人はマサチューセッツ工科大学の研究者をしており、世界貿易センタービルに激突したユナイテッド航空93便への搭乗を9・11の3日前に仕事の都合でキャンセルしたため命拾いをしました。

「人類の進歩と調和」を掲げて開催された大阪万博以降、世の中は技術の進歩によって格段に便利になりましたが、「人類の調和」という観点ではまだまだです。国家、文化、宗教の違いや経済格差などによるさまざまな問題が深刻化・過激化している現状にあって、パンゲアは世界の子供たちがつながりを感じられるプラットフォームをつくり、子供たちの国際交流を通じて平和な世界の構築に取り組むことをミッションとしています。そのために自分たちでICT (Information and Communication Technology：情報通信技術) を使って言葉の壁を克服するソフトウェア開発も行い、世界各国の拠点に集まった子供たちによるインターネットを介した国際交流に取り組んでいます。

今回、助成を受けた活動は、2018年7月22～29日に実施される「児童のための京都異文化サマースクール (Kyoto Intercultural Summer School for Youths) で、「KISSY (キッシー)」の愛称で呼ばれています。2016年夏のKISSYでは、京都大学に世界各国から30数人の子供たちが集まり、五つのチームに分かれて「夢」をテーマにボール紙や絵の具などを使った工作作品を共同制作しました。「ゲンゴロウ」と名付けられた多言語翻訳システムを使

い、それでも意思疎通できなければあらゆる手段を使ってお互いの考えを理解しようと努めます。こうして子供たちは、言葉や文化、価値観が

違って、お互いつながりあうことが可能で、その尊さに気づきます。KISSYは、ユネスコの文化多様性条約にある「多文化共生ができなければ、世界は持続可能ではない」という考えに基づいた活動で、大阪万博の理念の一つである「人類の調和」を促進するものです。



森由美子氏(左) (パンゲア 理事長)



児童のための
京都異文化サマースクール
(2016年8月)



写真提供:パンゲア

2018年度日本万国博覧会記念基金 助成先の事業紹介

チャイルド・エイド・アジア2018

事業者：特定非営利活動法人リトル・クリエイターズ

交付決定額：210万円

実施期間：2018年5月20日 実施地：東京都 サントリーホール大ホール

シンガポール、マレーシア、インドネシア、フィリピンから音楽的才能に恵まれた子供を招聘し、日本とアジアの子供たちが互いに協力しながら、言葉の違いや経済的格差を越えて一つの舞台に立ち、最高のコンサートを作り上げていく「チャイルド・エイド・アジア」を5月20日(日)に東京・サントリーホールで開催しました。

秋篠宮妃殿下、在日本インドネシア大使のご臨席を得て、約900人にご来場いただき、総勢95人の子供たちが、クラシックやポップスなどさまざまなジャンルの19曲を競演。日本インドネシア国交樹立60周年を記念して、インドネシアの曲も紹介しました。また、児童養護施設「石神井学園」の5人がシンガポールの児童とともに司会を務め、「聖園子供の家」の子供たちが製作した美術作品が舞台や劇場を飾りました。

本事業は、さまざまな生活環境で生きるアジアの子供たちが互いに助け合いながら音楽や美術を通じて自分を表現する場となり、彼らが夢と希望を持って生きていけるコミュニティーを育むことを目指しています。



撮影:高橋正美

ポール・クローデル生誕150周年記念『^{しゅす}繻子の靴』公演事業

事業者：京都造形芸術大学舞台芸術研究センター

交付決定額：160万円

実施期間：2018年6月9日～10日 実施地：静岡県 静岡芸術劇場

フランスの劇作家、詩人、外交官で、大正年間に大使として日本に滞在したポール・クローデル(1868～1955)の生誕150周年を記念して、6月9日、10日に静岡芸術劇場においてクローデルの代表作である長編戯曲『繻子の靴』全曲版が、SPAC-静岡芸術センターとの共同主催で上演されました。『繻子の靴』全曲版は、長年、日本と世界のフランス演劇研究をリードしてきた渡邊守章さんによる翻訳・演出で、2016年に京都芸術劇場春秋座で本邦初の上演が実現しましたが、今回の再演は、初演時のものを基本に新たなキャスト・スタッフも加わり再創作されたものです。上演時間が8時間を超えるという超大作にもかかわらず、2日間の公演は両日とも満席(入場者数591人)で、多くのメディアに高評価のレビューが掲載されるなど、大きな反響がありました。この歴史的な公演は関西・大阪21世紀協会(日本万国博覧会記念基金)からの助成によって実現されたものですが、秋には基金がかかげる理念である国際交流という視点から、「クローデルと日本」をテーマにした国際シンポジウムを、今公演と一体の事業として京都で開催する予定です。



撮影:井上嘉和

ヴィオラスペース2018 vol.27 第4回東京国際ヴィオラコンクール

事業者：東京国際ヴィオラコンクール実行委員会

交付決定額：210万円

実施期間：2018年5月26日～6月8日 実施地：東京都・大阪府・愛知県・宮城県

世界にも類を見ないヴィオラ音楽の祭典「ヴィオラスペース」の一環として開催。アジア太平洋地域における唯一のヴィオラ単独の国際コンクールであり、ヴィオラを通して、日本発信の世界へ向けた文化交流を目的としています。

2017年2月から出場者の募集を行い、世界の21か国と地域から83人の応募がありました。予備審査を経てコンクールには32人が参加、第1次、第2次、本選を経て3人の入賞者が選ばれました。期間中には、審査以外にも、ヴィオラスペースの流れを汲んだワークショップ、ガラ・コンサート(大阪、名古屋、仙台公演含む)が同時開催され、のべ2700人が来場しました。競い合うだけでなく、出会い、交歓し合う場となることを目指しており、次の審査に参加できなかった出場者には、審査委員との面談、ワークショップ、ガラ・コンサートへの招待といった機会が提供されます。また、入賞者は来年、再来年開催のヴィオラスペースにゲストとして招待され、その成長ぶりが披露されます。



第1位入賞:ルオジャ・ファンさん(中国)本選より



入賞者と審査委員

撮影:藤本史昭

テクノロジーとアートが融合する新しい表現を支援 「日本電通メディアアート支援寄金」創設

日本電通株式会社(本社：大阪市港区)は、2017年に創業70周年を記念して、同年、アーツサポート関西に「日本電通メディアアート支援寄金」を創設し、関西のメディアアートを支援することとなりました。

日本電通は1947年に大阪市阿倍野区で創業し、情報通信インフラの整備や情報処理サービスの提供などを行っています。同社は寄金の創設によって、自社の事業と深くかわる情報通信技術をクリエイティブな視点で表現するアートの可能性に注目。その拡大や新たな展開を目指します。2017年度から5年間にわたり総額300万円の助成を予定しており、2018年度は100万円を助成。支援対象はメディアアート作品の制作活動で、新たな価値観やイノベーションの萌芽を予感させる作品づくりをサポートします。

今年3月20日、グランフロント大阪において、同社代表取締役会長兼社長の上敏郎氏やアーツサポート関西運営委員の山本雅弘氏(毎日放送相談役最高顧問)らにより、寄金創設の記者発表が行われました。上会長は、「毎日

放送の山本相談役からASKの取り組みを聞いて素晴らしいと思った。IT関連のさまざまなサービスを提供している当社はクリエイティビティやイノベーションが大事だと考えており、その意味で技術とアートが



日本電通株式会社社長兼社長・上敏郎氏

出会う新しい表現の支援にチャレンジしてみようと思った」と寄金創設の動機を話しました。メディアアートに関わるアーティストを支援することは、長い歴史に培われた関西の文化に新たな息吹を与えるとともに、未来に向けた文化の継承にもつながると期待されます。

メディアアート…テレビやビデオ、コンピュータなどの情報通信技術を使った新しい美術表現。

スペシャルトークイベント

「メディアアートの今とこれから」

2018年3月20日／グランフロント大阪北館・The lab.

アーツサポート関西は、「日本電通メディアアート支援寄金」の創設に伴い、ナレッジキャピタル(グランフロント大阪内)に拠点を置くVisLab Osakaと連携し、メディアアートの支援プロジェクトに取り組んでいます。そのキックオフとして、アートプロデューサーの原久子氏(大阪電気通信大学総合情報学部教授)を進行役に、数々のナンセンスマシンの開発で知られる芸術ユニット「明和電機」の土佐信道氏と、ヒューマン・インターフェイスやバーチャル・リアリティの研究者である安藤英由樹氏(大阪大学大学院情報科学研究科准教授)の3人によるトークイベントを開催しました。

土佐氏は、ゴム製の人工声帯を空気で震わせて人間の笑い声に似せた音を出す「ワッハゴーゴー」などの開発経緯や、それらのマスプロモーション(ライブパフォーマンス)について紹介。また、マスプロダクション(商品化して販売するもの)として、音符の形をした電子楽器「オタマトーン」や魚の骨の形をした電気の延長コード「魚(ナ)コード」などの開発経緯や市場での反応などを紹介しました。そうした活動のなかで土佐氏は、絵を描いたりコンピュータを使って頭でイ

主催：アーツサポート関西

共催：VisLab Osaka(ビズラボ オオサカ)

協力：日本電通株式会社、一般社団法人ナレッジキャピタル

メージした得体の知れないモノを形にしていくこともメディアアートであると指摘しました。

安藤氏は、自身の研究成果について多くの人に関心をもってもらうために、満員電車を疑似体験するシステムを開発したり、三半規管に微弱な電流を流して平衡感覚を制御したりすることで、あたかも念力で相手を動かしているようなデモンストレーションなどについて紹介。そうした活動もメディアアートの一種であるとし、今後はそうした技術の体験を軸として、well-being(人々の心の豊かさや幸せ)につなげていきたいと語りました。

原氏は、「お二人の話聞いて、興味深い表現方法を使って技術を知ってもらおうとする発想も重要なのだが、その背景に日々のさまざまな研究や試行錯誤の積み重ねがあることを実感した」と語りました。



原久子氏



土佐信道氏



安藤英由樹氏

丸一鋼管が「ワンコイン文楽」支援の“バトン”を継承

大阪発祥でユネスコ世界無形文化遺産でもある人形浄瑠璃文楽。その楽しさを若い世代に伝え、伝統を受け継いでいく「ワンコイン文楽」(NPO法人 人形浄瑠璃文楽座 主催)を支援するため、丸一鋼管株式会社(本社：大阪市西区)がASKに「丸一鋼管 文楽支援寄金」を創設しました。ワンコイン文楽への支援はASKの支援第1号として2014年度にスタート。これまで京阪神ビルディング株式会社(2014～15年度)、岩谷産業株式会社(2016～17年度)が支援した4年間で延べ2,000人を超える若者がこの取り組みを通して国立文楽劇場で文楽を鑑賞し、大きな反響を呼びました。丸一鋼管は3代目の支援者となり、近畿圏在学・在勤・在住の30歳以下を対象とする「そうだ、文楽に行こう!ワンコインで文楽U-30」に対して、2018～19年度の2年間で500万円を助成します。

4月23日、国立文楽劇場において寄金創設の記者発表が行われ、同社代表取締役兼CEOの鈴木博之氏は、「地域に根ざした企業活動をモットーとする当社にとって、関西・大阪発のエンターテインメントである文楽への支援ができるのは、地域への恩返しでもあり光栄なこと。私自身、文楽太夫の竹本源大夫さん(人間国宝・2015年没)と懇意にさせていただいた縁で20年来小唄を習っており、伝統芸能



鈴木博之氏から人形浄瑠璃文楽座へ助成金の目録を贈呈。
左から鈴木博之氏、有栖川有栖氏、竹澤團七氏、吉田玉助氏
(記者発表にて)

の支援に携われるのはうれしい」と語りました。

また、記者発表には人形浄瑠璃文楽座理事長で三味線奏者の竹澤團七氏、同理事で人形遣いの吉田玉助氏、作家で大の文楽ファンの有栖川有栖氏らも同席。有栖川氏は、「30代の頃、大阪で物書きをしていて文楽を知らないというのは恥ずかしいと思った。何度か観るうちにその面白さに引き込まれ、文楽ファンを増やそうと会う人ごとに文楽の魅力を語って聞かせてきたが、私一人ではあまりに微力だった。そんな折、ワンコイン文楽やその支援者がいると知り、まさに渡りに舟のような思い」と笑顔で語りました。

ワンコイン文楽…近畿圏の若者をワンコイン(500円)で国立文楽劇場に招待し、公演前に技芸員が見どころ解説を行うなど、文楽の魅力により深く触れてもらう企画。

寺田千代乃 上方落語若手噺家支援寄金 第4回上方落語 若手噺家グランプリ2018 決勝戦

桂ちょうばさんと桂三度さんが同点優勝

上方落語の継承と若手噺家の育成を目的として、アートコーポレーション株式会社の寺田千代乃社長の寄付で創設された「寺田千代乃 上方落語若手噺家支援寄金」(500万円)から、毎年、ASKは若手噺家グランプリを支援しています。その4回目の決勝戦が今年6月19日、天満天神繁昌亭(大阪市北区)で行われ、審査の結果、桂ちょうばさんと桂三度さんの二人が同点で優勝しました。

今回は、入門4～18年の若手噺家40人がエントリーし、4回の予選を勝ち抜いた9人による決勝戦となりました。審査を行うのは在阪のテレビ・ラジオ局のプロデューサーやディレクターの7人。持ち時間の11～13分を1秒でも足りなかったり超えたりすると、いくら大ウケしたとしても大幅な減点が課せられます。そうした厳しい条件をクリアした出演者たちのレベルは非常に高く、前売りチケットも即日完売するほどの人気企画となっています。

死んで地獄へ行った男が地獄で物見遊山を楽しむ『地獄めぐり』で大いに沸かせた桂ちょうばさんは、終演後に受賞の喜びを聞かれて「(入門18年目までという)キャリア制限の最後のチャンスだったのでとてもうれしい。最新

の時事ネタを入れるために、本番直前まで必死で考えた」とホッとしたようす。また、コンビニへ強盗に入ったら店長や客たちが強盗以上に変人ばかりで大混乱に発展する新作落語『心と心』を好演した桂三度さんは、「予選で出演者の噺を聴いて、なんとレベルの高い戦いかと不安になったが、とにかく多くの笑いを取ろうと考えて新作でチャレンジした」と笑顔で語りました。優勝した二人には、寺田千代乃氏からそれぞれ賞金20万円と記念盾が贈られました。



受賞の喜びを語る桂ちょうばさん(左)と桂三度さん(右)
(終演後の天満天神繁昌亭にて)

ICT*を通して文化芸術振興と地域貢献

*ICT…Information and Communication Technology コンピュータ技術を活用した情報通信技術



今年6月、NTT西日本の代表取締役社長を退任して相談役に就任した村尾和俊氏(関西経済連合会副会長)に、関西の伝統芸能への思い、最新の情報通信技術を活用した地域振興策、大阪城を核とした文化芸術の構想を伺った。

て大胆にも、茶道界や華道界の重鎮など名だたる方々の前で、稀音家美穂一師匠とともにお祝いの曲を披露させていただきました。

きっかけは京都

2000年9月に東京から異動し、5年間京都支店長を務めました。着任してほどなくNHK京都放送局の山本壮太郎局長(当時)から「せっかく京都で働くんだから、これを機会に転勤族で京都の芸術文化を勉強する会をつくろう」と誘われ、大手企業の京都支店長たち20数人で「聞風会(もんふうかい)」という勉強会を立ち上げました。

聞風会では、京都のお寺を借りて華道や茶道、香道、座禅、京染めなどのさまざまな伝統文化を体験しました。そんなこともあって、長唄三味線の稀音家美穂一(きねやみほかず)さんに師事して三味線を習い始めました。きっかけとなったのは、私の京都着任の歓迎会を催してくださったとき、居合わせた舞妓さんに「私その三味線を弾いたら、踊って頂けますか」と尋ねると、「よろしおすえ」といわれたからで、ちょっと変わった動機だったかもしれません。

その後3年ほどして山本さんが異動されることになり、その送別会で三味線を披露しました。皆さんにお聴かせできるような腕前ではないと固辞しましたが、山本さんから「間違っって弾けば笑いをとって場も和む」と口説かれて断わり切れませんでした。そし

翌日、京都商工会議所から会頭の秘書の方が来社され、「今や京都の旦那衆でも、三味線を弾いたり小唄を歌わないのに、東京から来た人が、そうした芸事を披露してくれるのは素晴らしいことだ」とお褒めいただきました。また、日本経済新聞の交友抄に「三味線支店長」と紹介され、客先で「三味線支店長です」というと、とたんに和やかなムードになって話が進むようになりました。まさに「芸は身を助く」ということです。

ビジネスマンに必要な教養

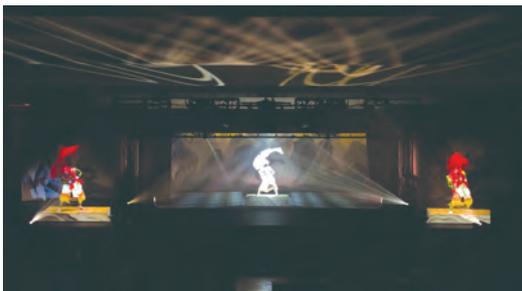
大阪で財界活動をするようになって、京都支店長時代にさまざまな日本の伝統文化を学んでおいて本当によかったと思いました。日本のビジネスマンの多くは、自国の伝統文化について関心が薄く、外国人が日本の伝統文化に触れても、その話題について行けないのです。恥ずかしながら、私自身、京都へ来るまでは伝統文化に思いを馳せたことなどありませんでした。

弊社にも仕事一筋のあまり文化や芸術に疎い社員は少なくありません。弊社の各支店が保有する建物や絵画の中には文化財的な価値を有するものがいくつかあるのですが、維持管理費がかさむという理由でそれらを処分しようとしたり、ぞんざ

いに扱うことができました。これでは大変なことになると思い、自分たちが引き継いだ文化や芸術を大切にしよう指示するとともに、「NTT西日本文化遺産」という制度を創設し、文化遺産と認定したものには、本社が維持管理費を出すことにしました。現在、建築物7棟、美術品14作品が指定されています。

最先端技術を社会貢献に活用

私どもはICT企業として、「Kirari!(キラリ!)」という新たな伝送技術を開発し、これを文化芸術振興や社会貢献に役立てることができると考えています。Kirari!とは、極めて臨場感のある3次元映像や音響を、世界のどこへもリアルタイムで瞬時に伝送できる通信技術です。弊社は、熊本地震の被災者の方々に少しでも元気になっていただきたいという思いから、2017年3月、熊本県庁にKirari!を持ち込み、松竹株式会社と共同で「歌舞伎シアター バーチャル座」と銘打ち、米国ラスベガスで公演した歌舞伎を観ていただきました。またKirari!を使えば、神楽のような地方の伝統芸能を東京や大阪で見ることができ、スポーツ観戦やオペラ鑑賞などもあたかもその場にいるように楽しむことができます。この技術によって伝統文化に対する人々の関心を喚起し、現地へ行ってみたいという観光振興の一助にもなるでしょう。



Kirari!「歌舞伎シアター バーチャル座」(2017年3月・熊本県庁)
(写真提供:松竹株式会社、日本電信電話株式会社)

地球環境保護の取り組み

情報通信サービスを提供する弊社は大量の電力を使用しており、企業の責務として、地球環境保護にも取り組んでいます。例えば、京都の葵祭に使われるフタバアオイが自然環境の変化によって減少していることから、2011年に「葵プロジェクト」を立ち上げました。上賀茂神社(京都市)から株分けしていただいたフタバアオイを社員や家族などが里親となって育て、一般財団法人葵プロジェクトの協力を得て上賀茂神社に植栽するものです。さらに2012年には「みどりいっぱいプロジェクト」を発足し、自治体やNPOなどと連携して、植樹や水辺環境の保全・再生に取り組んでいます。

関西・大阪の活性化に向けて

私は関西・大阪活性化の方策の一つとして、MICE・IR(マイス・アイアール)*の誘致が不可欠だと考えています。日本には巨大な国際会議施設や展示会場がなく、世界から多くの人を集める大イベントはシンガポールや香港に持っていかれます。それを大阪に誘致できれば、大きな経済効果が期待できます。海外からのビジネスマンは家族連れで来日されることもありますから、MICEに加えてリゾート施設も必要です。大阪には

関西国際空港があり、超大型客船が接岸できる港湾もあります。MICE・IRの候補地である夢洲から、外国の人たちに「瀬戸内海クルーズ」を楽しんでもらうのも一案です。本来の狙いは多くの人を呼び寄せる巨大な国際会議場や国際展示場ですが、そこに集まる人たちに楽しんでいただくため、カジノを含めたエンターテインメントの施設も必要です。

*MICEは、Meeting(会議)、Incentive travel(報奨旅行)、Convention(国際会議)、Exhibition(展示会)の頭文字で、企業活動などを中心とした多くの集客交流が見込まれるビジネスイベントの総称。カジノを核とするIR(Integrated Resort:統合型リゾート)と組み合わせることで、ビジネスと観光の大きな経済効果が期待できる。

エディンバラ視察で思ったこと

関西経済同友会 歴史・文化振興委員会の副委員長をしていた私は、イギリスの文化振興の現状を学びに、2011年9月にスコットランドのエディンバラフェスティバルを視察しました。世界中からさまざまなアーティストを呼び寄せ、人口50万人足らずのエディンバラに、世界各国から450万人もの観光客が押し寄せる大イベントです。ここで私は、現地のアーツカウンシル(芸術文化の振興を目的に、各種芸術文化事業への助成を中心とした支援を行う独立機関)の運営手法を目の当たりにしました。文化振興の財源は行政からの助成金や企業、個人からの寄付ですが、^{*}政府はお金(助成金)は出しても運営には口を出さない、アームズ・レングス(腕の長さ分距離をおく)という経済学者・ケインズの考えが徹底されており、助成金の活かし方は、役人ではなくアーツカウンシルの民間専門家に任せられています。この考えを持ち帰り、同友会の提言がもとで創られた民間版文化支援機構が、現在の「アーツサポート関西」です。

エディンバラはエディンバラ城を中心としたスコットランドの古都です。そこでこれだけの成果を上げていることに習い、大阪でも大阪城を核として、文化芸術の振興と地域活性化のビジョンを描くことが可能だと思います。その際、Kirari!のような最先端技術も活用して、広く海外にも発信していくことが重要になるでしょう。



稀音家美穂一氏と三味線演奏を披露する村尾和俊氏(2003年7月・京都ホテルオークラにて)



NTT西日本文化遺産の「旧京都中央郵便局西陣分局」(1921年建築・国指定重要文化財)

(写真提供:西日本電信電話株式会社)

村尾和俊氏

1952年、兵庫県新温泉町生まれ。1976年京都大学法学部卒業、日本電信電話公社入社。NTT広報部報道部門長、秘書室長、京都支店長、常務取締役経営企画部長などを経て、2012年代表取締役社長、2018年6月相談役。2018年5月より関西経済連合会副会長。

西日本電信電話株式会社

本社:大阪市中央区馬場町3番15号
1999年7月1日設立。資本金3,120億円、従業員数3,950人、事業所・本社、地域事業本部(関西、東海、北陸、中国、四国、九州)、地域事業部(支店・各府県に設置)

フィールドワークを通して 大阪南部地域の歴史文化を記録・発信



南大阪・上町台地フォーラム

上町台地や大阪南部地域の歴史文化の魅力を再発見するための調査研究として、同地域での実地調査を行い、それを記録・発信する「南大阪・上町台地フォーラム」。活動期間は平成23(2011)年度～30(2018)年度で、当協会賛助会員や一般市民を対象に、祭礼や遺構などの現地見学や講演会を開催。その内容を、当誌や協会ホームページに掲載したり、21cafeで紹介したりしてきた。その7年間・21回の活動を振り返る。



▶2011年4月22日

四天王寺「^{しょうりょうえ}聖霊会

大阪市天王寺区

1400年の歴史をもつ舞楽大法要「聖霊会」は、聖徳太子の命日(旧暦2月22日)に行われる四天王寺でもっとも重要かつ大規模な法要。伽藍の北にある六時堂で仏舍利と聖徳太子の御霊を迎え、法要の間は堂前の亀の池の上に設けられた石舞台で、天王寺楽所(かくそ)による雅楽や舞楽(重要無形文化財)が途切れることなく奉納される。この日は雨天であったため、六時堂内で実施された。5月14日には一般社団法人心学明誠舎主催の聖霊会講演会(講師：南谷美保氏ほか)にも参加した。



四天王寺「聖霊会」での舞楽(六時堂)
(本来は石舞台の上で行われる)

▶2011年7月12日

生^{いくくに}國魂^{たま}神社 「枕太鼓おねり」

大阪市天王寺区

神武天皇が九州から瀬戸内海を東上し、なにわの岬(現在の上町台地の北端)に着いたことに起源をもつ生國魂神社(当時はこのあたりまで海だった)。平安時代からの歴史をもつといわれる同社の夏祭りは、「陸」の生玉・「川」の天神と並び称され、明治から昭和初期にかけては1千人を超える「陸渡御」で賑わった。その先頭で邪気を払うのが「枕太鼓」で、赤い烏帽子に法被姿の願人(がんじ：叩き手)の背もたれが大きな枕に似ているところからその名がついた。



生國魂神社「枕太鼓」

▶2011年7月25日

生^{いくね}根神社夏祭り 「だいがく」

大阪市西成区

だいがく(台楽または台額)は、清和天皇(850～881年)の時代、難波一帯を早魃が襲った際、日本60余州の一の宮の御神燈と鈴を付けた檣(やぐら)を立てて雨乞いをしたら、大雨が降ったことが始まりといわれる。生根神社のだいがくは高さ20mの柱に約70個の提灯を飾りつけたもので、かつては各所にあつたが戦災などで焼失し、現在は同社に保存されている1基のみ。大阪府の有形文化財に指定され、夏祭りの2日間だけ公開される。



生根神社本殿と「だいがく」

▶2011年7月31日

住吉大社「夏越祓神事」

大阪市住吉区

大阪市内の夏祭りの最後を飾る住吉祭で、夏の疫病を払う夏越祓神事(無形文化財指定)の「茅の輪くぐり」を体験。午後5時、美しく着飾った夏越女や稚児らに一般市民も加わり、境内3か所に設えた「茅の輪」をくぐって夏越しのお祓いをした。小出英詞権禰宜による講演もあり、第一本宮での例大祭の模様を見学した。



茅草(ちがや)で自身を祓って茅の輪をくぐれば、暑い夏を元気に乗り切ることができるといわれている。

▶2012年1月11日

四天王寺手斧始め式

大阪市天王寺区

「手斧始め式」は四天王寺の年中行事の一つで、宮大工の仕事始めの儀式(非公開)。飛鳥時代、聖徳太子に招かれて仏教建築の先進地・百濟から渡来した工匠・金剛重光が四天王寺造営の正大工職を賜ったことから、現在も株式会社金剛組(本社：大阪市天王寺区)が奉仕している。金堂内の本尊「救世観世音菩薩」の前で、烏帽子上衣装束姿の正大工らによって、角材に墨を付ける「墨掛け大事」や手斧を打ち込む「手斧打ち大事」などが行われる。



四天王寺金堂での「手斧始め式」

▶2012年5月5日

大念佛寺「万部おねり」と町屋敷

大阪市平野区

大念佛寺は大阪府内で最大規模の木造建築(本堂)をもつ融通念佛宗の総本山で、毎年5月1日から5日に大法会「万部おねり」が行われる。臨終の際に極楽浄土から阿弥陀仏が諸菩薩を従えて迎えるのを疑似体験する「聖聚来迎会」(大阪市無形民俗文化財)と、阿弥陀経を1万部唱える檀信徒や有縁無縁の諸霊を回向する「万部会」が合体した大法会で、その見学の後は、平野に古くから残る町屋敷も視察。平野郷の歴史について郷土史研究者・松村長二郎氏の話を知った。



聖聚来迎会(大念佛寺)

▶2012年7月13日

がんこ平野郷屋敷と杭全神社夏祭り

大阪市平野区

がんこ平野郷屋敷は、江戸時代初期に菜種油商として富を築いた辻本家の本宅(通称：平野郷屋敷)を、がんこフード株式会社(本社：大阪市淀川区)が受け継ぎ、和食レストランとして再利用。館内にある「くらしの博物館」には、辻本家が所有していた絵画や茶器などが展示されている。夕方には杭全神社に移動し、同社の夏祭りで江戸時代から伝わる「だんじり」を視察。平野の9町(9台)のだんじりが、雄壮かつ賑やかに繰り出すようすを見学した。



杭全神社夏祭り「だんじり」

▶2013年7月15日

高津神社と講談「千両の富くじ」

大阪市中央区

仁徳天皇を主祭神とし、上方落語の「高津の富」「高倉狐」「崇徳院」や、歌舞伎、文楽などにも数多く登場する高津神社を参拝。境内にある仁徳天皇の高津宮(たかつのみや)を模した絵馬殿や、250年以上前から現存する神輿庫を見学し、小谷真功宮司から高津宮にまつわる興味深い話を聞いた。また、講談師の旭堂南青さんより、高津神社にちなむ「千両の富くじ」も披露され、浪速の人情物語に聴き入った。



小谷真功宮司から絵馬殿の案内を受ける

▶2013年9月19日

住吉大社「観月祭」

大阪市住吉区

中秋日(旧暦8月15日)、住吉大社の反橋(太鼓橋)の上に中秋の名月がかかるなか、橋の上で和歌や俳句を詠み、舞楽や住吉踊りなどが奉納される「観月祭」。その風雅な伝統神事を反橋のたもとで見学した。また、観月祭に先立ち、同社吉祥殿にて小出英詞権禰宜による「住吉さんは和歌の神様～お月見によせて～」と題した講演が開かれた。



住吉大社反橋での観月祭

▶2013年11月29日

阿部野神社と花將軍

大阪市阿倍野区

鎌倉時代末期の公卿・武將で、紅顔の美男子であったことから「花將軍」と呼ばれた北畠顕家(1318～1338年)ゆかりの阿部野神社を訪ねた。同社は、顕家の父で後醍醐天皇の信任が厚かった北畠親房(1293～1354年)をご神体とする官社で、父子の墓所。調査隊は北畠父子の生涯をNHK大河ドラマ『太平記』(1991年放送)を観て振り返り、中塚昌宏宮司(当時)の案内で境内を見学。旭堂南青さんによる講談『後醍醐天皇』も聴き、戦乱の歴史を偲んだ。



中塚宮司の案内で境内を見学

▶2014年4月4日

堺市博物館
～百舌鳥古墳群

大阪府堺市

堺市博物館では、仁徳天皇陵出土品のレプリカを見た後、学芸員から仁徳天皇陵の築造には16年の歳月をかけて200万人以上が従事したことや、その仕事は苦役ではなく食糧も支給されて和やかに進められたことなど、興味深いエピソードを聞いた。また、堺観光ボランティアガイドの案内で、仁徳天皇陵古墳や履中天皇陵古墳などの百舌鳥古墳群や、奈良時代の高僧・行基によって築かれた仏塔「土塔(どとう)」などを視察。堺の歴史の多様さ奥深さに触れた。



土塔(堺市中区土塔町)にて

▶2014年9月13日

清学院、薫主堂、
水野鍛錬所など

大阪府堺市

堺における刀鍛冶などの産業の歴史を、南海電鉄「七道駅」から歩いて探索。日本で初めてヒマラヤを越えた僧侶・河川慧海(かわぐちえかい)が学んだ寺子屋「清学院」や、明治時代から続く線香店「薫主堂」、鉄砲鍛冶屋敷、鍛冶工房の「水野鍛錬所」、山口家住宅(堺市立町家歴史館)、伝統産業会館を視察した。水野鍛錬所では、実際に工房に入って鍛冶職人から説明を受けた。



水野鍛錬所にて

▶2014年11月24日

与謝野晶子や千利休の
生家跡など

大阪府堺市

堺市観光ボランティアガイドの案内で、堺の中世の歴史を探訪。与謝野晶子生家跡や、大阪湾の出入口を守るといわれる開口(あぐち)神社、千利休生家跡、納屋(呂宋)助左衛門の居宅を移したとされる大安寺、重要文化財の仏殿(天井に八方睨みの龍)がある南宗寺、南蛮貿易時代のシャム(タイ)から持ち帰った降魔釈迦銅像(ごうましゃかどうぞう)(初公開)のある發光院などを見て回った。昔の堺の人は略奪愛を貫いた与謝野晶子を快く思っていなかったことなど、数々の興味深い話も聞いた。



開口神社にて

▶2015年10月22日

大阪府立
弥生文化博物館

大阪府和泉市

「日本の文化と食の源流」をテーマに、和泉市の弥生文化博物館と池上曾根遺跡を訪れた。同館は弥生文化に関する資料や情報を収集・保存・研究・展示する博物館で、全国で唯一、地元の遺跡のみならず弥生文化全般を対象としている。学芸員から米づくりや青銅器などの発祥や、社会のしくみができていった過程や卑弥呼の登場など、弥生時代の文化や生活について説明を受けた。また、同館に隣接する池上曾根遺跡では、大型掘立柱建物を見学した。



卑弥呼の食事の再現(弥生文化博物館)

▶2015年12月4日

富田林寺内町

大阪府富田林市

近世以降、南河内随一の商業地といわれた富田林寺内町を探訪。当地は室町時代後期の永禄初頭(1558～1561年)に興正寺別院の建立と町割の整備によってできた宗教自治都市で、江戸時代には商売が盛んな在郷町として発展。平成9年(1997)に国の重要伝統的建造物保存地区に指定された。ボランティアガイドの案内で商家の町並みを視察した後、寺内町に現存する最古の建物で江戸時代に造り酒屋として栄えた杉山家(国指定重要文化財)を見学した。



富田林寺内町にて

▶2016年3月29日

大阪府立 狭山池博物館

大阪府大阪狭山市

狭山池は今から1400年前の7世紀初めに築造された日本最古のダム式のため池で、『古事記』や『日本書紀』にも記載されている。狭山池は、誕生から今日にいたるまで数多くの大規模な改修工事を行ってきた。博物館では、そうした改修の歴史や各時代の土木技術などについて説明を受けた。明治から昭和にかけては、近隣地域の米の生産量を増やすため、国や行政の補助で改修。現在は治水機能を備えた近代的ダムへと進展している。



かつての土木技術について説明を受ける
(狭山池博物館)

▶2016年10月14日

真田幸村の足跡を辿る (九度山)

和歌山県九度山町

関ヶ原の合戦(1600年)の後、徳川家康に命じられて高野山に蟄居した真田昌幸・幸村父子は、その後、高野山を下りて九度山に14年間定住した。その和歌山県九度山町を訪ね、九度山の語り部ボランティアガイドの案内で、真田の抜け穴伝説が残る「真田古墳」をはじめ、昌幸・幸村父子の屋敷跡に建てられた寺「真田庵(善名称寺)」や、同寺境内の「真田方宝物資料館」、「九度山・真田ミュージアム」を見学した。



真田庵にて

▶2016年10月26日

真田幸村の足跡を辿る (玉造～大阪歴史博物館)

大阪市天王寺区、中央区

大坂の陣(1614年、15年)で激戦地となった上町台地(真田山界隈)を探访。講談師・旭堂南青さんの案内で、大坂冬の陣の際に幸村が築いた出城「真田丸」の跡地・三光神社や、幸村とその子大助の供養のため江戸時代に建てられた心眼寺(しんがんじ)、大坂城の鎮守として信仰された玉造稻荷神社



を訪ねた。大阪歴史博物館では、幸村にまつわる新発見資料などを見学した。

旭堂南青さん



三光神社に残る「真田の抜け穴」

▶2017年3月8日

住吉大社と大和川・堺

大阪市住吉区

住吉大社・小出英詞権禰宣の案内で、同社の境内でフィールドワークを実施。その後は講演会場に移り、宝永元年(1704)の付け替え(流路変更)で大和川が住吉と堺を横断・西流したことにより、住吉大社の祭礼や神輿の道筋が変わったことや、土砂の堆積による海岸線の後退、新田開発などについて、古地図や古文書、屏風絵などを用いた説明を受けた。



小出英詞権禰宣と参加者

▶2017年6月22日

大和川のおいたち ～付け替え工事

大阪府柏原市

柏原市立歴史資料館の安村俊史館長より、大和川の地理や付け替え工事について講義を受けた。大和川は奈良県桜井市の北東部に端を発し、生駒山と葛城山の間を抜けて柏原市に入り、大阪市と堺市の堺を西流して大阪湾に注ぐ延長68kmの一級河川。安村館長からは、宝永元年(1704)に付け替えが行われるまでは流域で洪水が頻発していたことや、14kmにおよぶ付け替え工事の内容、約8か月の短期間で完工した背景、付け替えによって生じた影響などの説明を受けた。



安村俊史氏

▶2018年3月16日

こうのいけ しん でん かい しよ 鴻池新田会所

大阪府東大阪市

大和川付け替え工事の後、鴻池善右衛門宗利とその子善次郎によって、流れが途絶えた川筋などに約158haの新田が造成された。鴻池新田会所は、そうした新田経営にあたって小作料の徴収や幕府への年貢の上納、新田内での争いの裁定といった管理・運営を行う施設で、240年にわたって使われてきた。現地では、学芸員からそうした説明を受け、当協会の堀井良殷理事長による調査報告も行われた。



鴻池新田会所内部(国史跡・重要文化財)

イベント報告

関西・大阪21世紀協会は、「助成と顕彰」、「関西・大阪ブランドの発掘と発信」、「伝統の進化と創造」の3つを事業の柱としています。ここではそのなかのいくつかをご報告します。

「平成OSAKA 天の川伝説2018」開催中止について

この度の平成30年7月豪雨により被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。7月7日(土)に開催を予定しておりました「平成OSAKA 天の川伝説2018」は、お客様の安全を最優先に考え、中止とさせていただきます。ご理解を賜りますようお願いいたします。

住吉大社 御田植神事 (国指定重要無形民俗文化財)

6月14日 / 住吉大社(大阪市住吉区)

神功皇后が五穀豊穡を祈るため住吉大社に神田を設け、長門国(現在の山口県)から植女(うえめ)を召して御田植奉仕をさせたことにはじまる「御田植神事」。明治時代に入って境内の土地が民間に払い下げられ中断したが、大阪新町廓が御田を買い上げ、芸妓が植女となって神事廃絶の危機を救いました。現在は関西・大阪21世紀協会(上方文化芸能運営委員会)などが、大阪の誇るべき伝統文化・神事芸能として支援しています。この日は、約4,000人の参拝者が見入る中、御田に設えた舞台上で御稔女(みとしめ)による雨乞い祈願の「神田代舞(みとしろまい)」や、田の周囲で無形文化財の住吉踊りなどが奉納されました。

神田代舞を奉納する
安田奈那子さん



齋牛による代掻き(御田植神事)

交流サロン21cafe 八十島(やそしま)の御霊・生國魂神社

中村文隆氏(生國魂神社 筆頭権禰宜) 3月15日 / 中之島センタービル

生國魂神社の筆頭権禰宜・中村文隆氏を招き、同社が約2700年の歴史をもつ大阪最古の神社であることや、御祭神が日本列島そのものの御霊(みたま)であることなどが紹介されました。

同社は、日向国(現在の宮崎県)から瀬戸内海を東征してきた神武天皇が現在の大阪城あたり(当時は上町台地まで海が迫っていた)に着き、ここで生島(いくしま)大神と足島(たるしま)大神を祀ったことに始まります(豊臣秀吉が大坂城築造の際に現在の場所に移転)。この2柱を合わせて八十島(やそしま)大神といい、日本列島そのものの御霊を指しています。平安時代から鎌倉時代には、同社で皇位継承の儀式である「八十島祭(やそしまさい)」が行われていました。



中村文隆氏

交流サロン21cafe 大阪の美術館の歴史を振り返って

橋爪節也氏(大阪大学総合学術博物館、大阪大学大学院文学研究科教授)
6月26日 / 中之島センタービル

近代大阪の美術史が専門の橋爪節也氏を招き、大阪における戦前・戦後の美術館の歴史や、大正時代から戦後の文化行政の理念などを伺いました。例えば大阪で最初の「美術館」は、明治21年(1888)の「大阪府立博物館中央館(美術館)」(大阪市中央区)で、絵画を柱に掲げたり、壁一面に何枚も掲げる見本市会場のような建物でした。大正14年(1925)に東京市を抜いて大阪が日本一の巨大都市になると、行政は「人口が多いだけで一流の都市とはいえない」という考えのもと、美術館を「文化施設」とみなしました。また、佐伯祐三作品のコレクターであった山本發次郎(1887~1951)は、「美術品の蒐集は道楽のように思われているが、私は永遠の文化事業であると信じている」との主旨の名言を残しています。



橋爪節也氏

新刊のお知らせ

【関西・大阪21世紀協会編著】

歴史は生きている 最新フィールドノート

なにわ大坂をつくった100人 古代~15世紀篇

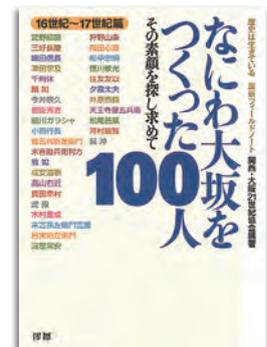
古代から近世まで、なにわ大坂にゆかりの深い100人の痕跡を訪ね、現代にどのように伝わっているのかをルポルタージュするシリーズの第2弾。古代~15世紀に活躍した31人(伝説上の人物を含む)を収録しました。発行予定は8月下旬。発売準備が整い次第、協会ホームページなどでお知らせします。

主な掲載人物：神武天皇、神功皇后、王仁、仁徳天皇、物部守屋、聖徳太子、小野妹子、行基、道鏡、坂上広野麻呂、菅原道真、安倍晴明、渡辺綱(源綱)、楠木正成、北畠顕家、一休宗純など

既刊「16世紀~17世紀篇」は、大阪府内書店、Amazonなどで発売中

*書店にない場合は、書店にてご注文いただくか、発行元(株式会社滯標)にご注文ください。

発行元：(株)滯標
大阪市中央区内平野町
2-3-11-203
TEL.06(6944)0869
FAX.06(6944)0600



サイズA5判 / 並製カバー装 / 本文266頁 定価1,600円+税

御食国 関西 自然と歴史が生んだ和の雫 ～知られざる日本酒の魅力～(25分)

総合監修：佐々木洋三(関西・大阪21世紀協会 専務理事)
制作著作：ケイ・オプティコム 関西・大阪21世紀協会



古くから神に捧げられ「百薬の長」と崇められてきたお酒。日本酒は自然環境に磨かれ育まれてきた「國酒」であり、日本を代表する食文化です。日本酒の国内消費量は、1970年代に比べると68.3%も減少しました。一方、清酒の輸出量は海外での和食ブームもあって、40.8%も増加しています。当番組では、関西発祥とされる清酒の歴史を紐解くとともに、お酒をどう盛り上げていくか探ります。

日本最古の神社である大神神社(奈良県)は、「お酒の神様」として日本書紀に記述が残されており、お酒造りの神様として長らく信仰されてきました。また、菩提山正暦寺は、醸造技術を発展させ、それまでの「どぶろく」(濁り酒)から、澄んだ清酒を生み出しました。

一方、伊丹においては、お米と水を三回に分けて仕込む「三段仕込み」という洗練された製法を開発。酸度を保ち、雑菌の繁殖を抑え、さらに保存がきくように火入れを行い、容器を甕から木の樽に変えるなど大量生産を可能にしました。このように現代の酒造りに通じる醸造方法を編み出し、品質の高い清酒(澄み酒)を大量に造って江戸にも市場を拓きました。当時、江戸ではまだ濁り酒が主流であり、上質な上方の清酒が「樽廻船」で運ばれ、「下り酒」としてもはやされました。この下り酒が美味しかったことから、下り酒以外を「くだらない」ものと呼び、今日の「くだらない」の語源になったのです。また、最高の酒米として人気がある「山田錦」が後背地にあり、六甲山の急流を利用した水車による精米技術、酒造りに適した宮水により、灘五郷にも酒造りの拠点が移りました。このように関西は「清酒発祥の地」として、



大神神社



正暦寺



て、確固たる地位を確立しました。

今日の海外での日本酒ブームについて、アメリカ人日本酒ジャーナリストであるジョン・ゴンドナー氏は、ワインのプロであるソムリエが日本酒に興味を示したことが背景にあり、日本酒はワインと違ってどんな料理にもあうため、食中酒として飲まれており、和食店だけではなくイタリア料理、フランス料理などでも提供されるようになったことが日本酒ブームのきっかけになったと見えています。

銘酒を提供するお店として名高い、大阪市中央区の料理店「かむなび」が全国各地の蔵元から厳選した銘酒を取り揃え、日本酒と和食の新たな楽しみを発信しています。

わが国でも日本酒ブームがよみがえる日は近いのではないのでしょうか。



樽廻船(沢の鶴資料館)



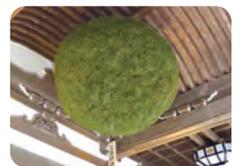
かむなび



ナビゲーター：仲みゆき

詳しくは当番組で!

奈良の大神神社から全国の蔵元へ届けられる杉玉※
(※新酒ができたことを知らせるサインだった)



伊丹では「三段仕込み」という洗練された製法が開発された

灘で酒造りが発達したのは、宮水と酒米と海運の便



水の硬い灘は「男酒」、水の軟らかい伏見は「女酒」

関西・大阪21世紀協会は、動画「関西食探訪」をウェブサイトに掲載しています。

YouTube

関西食探訪



で検索

または、関西・大阪21世紀協会ウェブサイト「関西の魅力」にアップ中です。
<http://www.osaka21.or.jp/movie/>

上方花舞台 ～ 歌舞伎と日本舞踊の競演 ～

第20回を記念して、上演日を2日間に。より多くのお客様に、邦舞・邦楽の魅力を存分にお楽しみいただけます。

構成・演出 藤間勘十郎

出演 市川猿之助、藤間勘十郎、尾上右近、中村鷹之資、中村梅丸 若柳吉藏、尾上菊之丞ほか

日時 2018年9月20日(木)14:00開演(13:30開場)

21日(金)第1回目11:00開演(10:30開場) 第2回目15:00開演(14:30開場)

会場 国立文楽劇場(大阪府中央区日本橋1-12-10)

入場料 8,000円(全席指定)

主催 (公財)関西・大阪21世紀協会 上方文化芸能運営委員会

チケット販売先 国立文楽劇場(TEL.06-6212-2531)/関西・大阪21世紀協会 上方文化芸能運営委員会(TEL.06-6110-5245)

お問い合わせ (公財)関西・大阪21世紀協会 上方文化芸能運営委員会 TEL.(06)6110-5245 FAX(06)6110-5246



Flügel abend 2018 ～未来へ羽ばたけ大阪文化力～

*Flügel(翼) abend(夕べ、夕方)

大阪文化芸術フェスティバル2018

関西・大阪の舞台芸術を代表するアーティストたちが、圧巻のパフォーマンスを披露。この日だけの特別コラボレーション企画も予定しています。

出演 周防亮介(ヴァイオリン)、大阪コレギウム・ムジクム、地主薫バレエ団、関西フィルハーモニー管弦楽団、春野恵子(浪曲)

日時 2018年10月5日(金)18:30～21:00

会場 NHK大阪ホール(大阪府中央区大手前4-1-20)

主催 大阪文化フェスティバル実行委員会 (公財)関西・大阪21世紀協会

お問い合わせ (公財)関西・大阪21世紀協会 文化事業部 TEL.(06)7507-2002 FAX(06)7507-5945



昨年度の様子



アートストリーム2018

関西を中心に活躍する新進アーティストの展覧会&マーケット。一般公募の中から厳しい選考を通過した85組が、ハイレベルな作品を展示・即売します。

日時 2018年9月28日(金)～30日(日)

12:00～20:00(28日)、10:00～18:00(29、30日)

会場 大丸心齋橋店北館14階 大丸心齋橋劇場&イベントホール (大阪メトロ御堂筋線「心齋橋駅」南北改札、南南改札より直結)

入場料 無料

主催 アートストリーム実行委員会(関西・大阪21世紀協会、大阪芸術大学、大阪府、大阪市)

お問い合わせ (公財)関西・大阪21世紀協会 文化事業部 TEL.(06)7507-2002 FAX(06)7507-5945



YOHEYさんと作品 (昨年度の関西・大阪21世紀協会賞)

日本万国博覧会記念基金助成事業

2019年度の助成事業を募集します。

申請書受付期間：2018年9月3日(月)～10月1日(月)※当日消印有効

助成予定総額(国内事業、国外事業の総額)…9,200万円



助成対象事業

2019年4月1日～2020年3月31日までに実施される事業で、万博の成功を記念するにふさわしく、「日本万国博開催の意図」の趣旨に適った国際相互理解の促進に資する活動(①国際文化交流、国際親善に寄与する活動、②教育・学術に関する国際的な活動)。

募集要項および申請書

当協会ホームページからダウンロードできます。

<http://www.osaka21.or.jp/jecfund/information/>

助成金額の申請

- ・助成対象事業の合計の3/4以内を上限として、10万円単位で申請してください。
- ・重点助成事業…助成金1,000万円を上限として、数件程度採択を予定しています。(該当なしの場合もあります)
- ・一般助成事業…助成金300万円を上限として数十件程度採択します。

お問合せ・申請書送付先

(公財)関西・大阪21世紀協会 万博記念基金事業部

TEL.(06)7507-2003 E-mail jec-fund@osaka21.or.jp

関西・大阪21世紀協会賛助会員 入会のご案内

関西・大阪の活性化のため、皆様のご支援をお願いします。

会費(何口からでも結構です)

■法人会員1口につき年会費10万円

■個人会員1口につき年会費1万円

特典

- 1.協会が発行する刊物の配布
- 2.協会が主催する各種セミナーなどへの案内
- 3.賛助会員の参考となる情報・資料の提供など

お問合せ(公財)関西・大阪21世紀協会 総務部